

「なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？」読書感想文
北海道大学経済学部経営学科 2年 01135099 斎藤ひかる

1. どうしてこの本を選んだのか？

「“やりがい”搾取」、「“自己実現”幻想」という、本の帯に書いてある言葉に惹かれた。わたしたちはあと1年もしないうちに就職活動が始まる（先輩の話によると、早い人は3年生の夏からいろいろはじまるらしい。そう考えると最短であと半年ほどしかないのである……）。それで、「御社に入って自分はこんなふうになりたい！」とか言って御社を回るのが普通のはずだと考えたとき、せめてこういうシステムになってしまった原理だけでも知っていれば、逆に就活をがんばれるのではないかなと思った。また、今なぜ自分がユニクロのアルバイトをし続けているのかという理由もわかるのかなという興味もあった。とくにほしいものがあってお金を貯めようと思っているわけではないので、どうして自分であんなにシフトを入れて出勤しているのか本当に謎だ。現時点で今自分が社会人となることを求められて、社会人っぽくふるまっているのがアルバイトであり、この本を読み進めるにあたって例としてよくアルバイトが当てはまったのでことあるごとに触れていく。

2. 前評判、読了後すぐの感想など

この本を読む前に、インターネットでいろいろ調べたが、「これってどうなの」「わかりにくい」というような微妙な感想ばかりだった。ただ、わたしはマルクスの思想やスピノザの哲学の基礎知識がゼロなので「スピノザ哲学でこの理論を説くのは無理があるうんぬん……」といった批判は不可能だと思い、気を取り直して読み始めた。

読了後の感想は、「読まなければよかった」。まず、わたしたちの働く理由となる欲望について、その後企業がわたしたちを隷属させる理屈を説いたこの時点でもう現実を突きつけられた感じがしてアルバイトに行きたくなくなったが、最後の章が「“労働による支配”からの脱却をめざして」という題だったので根気よく読み続けた。が、特に大したフォローもなく終わってしまって拍子抜けした。こういう見解があるのだということを知っても、国家なり企業なりに隷属することでしか生きていけないのだということがわかった。

3. 【はじめに】なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？—「やりがい搾取」や「自己実現幻想」を超えて

“賃金労働者”は、資本主義の本来の思想的準則である自由主義の、「“他人を利用するのも自由”なら、“他人に利用されるのも自由”」（フレデリック・ロルドン著、なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？p.16）という発想のもとにうまれた。さらに、この資本主義は、スピノザのいう情動によって作りだされていると考えられる。資

本主義は、幹部労働者のような「満ち足りた労働者」（同書 p.19）をうみだすことを理想としており、わたしたち労働者の側も、強制的になることに無頓着になっている。いかに隷属することが手っ取り早く不幸に慣れる方法だからといって、これは冷静に考えると非常に妙なことである。どうしてこのようなことが起こるのかが、以降の章で紐解かれていく。

ここでわたしが幸福な被支配者になっている理由として思いついたのが、ユニクロのサンキューカード制度である。名刺サイズの小さなカードに、たとえば「ゴミを片付けてくれてありがとう」とか「わからないことがあったとき、フォローしてくださってありがとうございました」とか「〇〇さんの笑顔、とてもいいと思いました」といったことを書いて相手のロッカーに挟んでおくのだ。休憩室の壁に貼られているスタッフ名の一覧表にサンキューカードを1枚書いたら自分の欄に丸をつけていく。1か月のあいだで1枚も書いていない人はマーカーを引かれてあとで怒られて強制的に何枚か書かされるので、企業の徹底ぶりがうかがえる。サンキューカードをもらうためにがんばろうとは思わないし、もらわなくても何も思わないのだけど、実際にもらったらとてもうれしいものである。自分のこんな行動を誉めてもらえた、認めてもらえた、役に立ったのだという感情は自己肯定感情につながり、予想以上にやる気を引き出される。前期の経営学Iの授業でもこんなことを言っていたし、理にかなった施策は労働者をうまく扱うのだと納得した。

4. 第1章 “何かをしたいさせたい” という欲望

コナトゥスとは、自らを動かすエネルギー＝生きるエネルギー＝欲望のエネルギーであり、つまり「身体を動かすための欲望の連系の総体」（同書 p.26）である。これが何かをしたいという欲望だ。対して、何かをさせたいという欲望は、賃労働関係の本質である「第三者の行動的潜勢力を自らの産業的欲望の追求のなかに組み入れること」（同書 p.27）がもとになっている。経営者は、隷属者の努力（コナトゥス）を捕獲することが重要となる。資本主義はこのような欲望のなかでお金がまず重要だとする。そこでは労働の商業的分業への依存が必要となり、「人間は労働力を売るしかなくなった」（同書 p.33）。お金は、賃労働関係の媒介であり、すべての欲望の通過点となった。このお金への依存以上に起動的なものはないため、賃労働関係の組み込みを堅固なものにする。

さて、“意志的隷属”について。個人は自由意志を持った存在であるから、隷属に陥るとしたらそれは意志的なものである。では、どうして人は望まない状況を望むことができるのか？スピノザによると、「欲望と情動の奥深い他律性」（同書 p.45）が重要となる。自律的な意志によるものはひとつもないのだ。肉体的従属という束縛を除外すれば、人は“望む”ことによってしか自らを束縛することはない。「そしていかに不可思議であれ、人はこうした“意思”による束縛に身を捧げ続けるのである。」（同書 p.47）

経営者（資本家）は自分一人では達成できない欲望を達成させるために、経営者を筆頭に、上に依存し下を道具化する支配の鎖列を作り上げるが、賃金労働者がそこに組み込ま

れざるをえない理由がとても興味深い。この社会的鎖列はいろいろな財と繋がっているものなので、ここから断ち切ってしまうと自らの欲する財を失ってしまうのだ。自分の欲しいものを手に入れようとするならば、この社会的鎖列に黙って組み込まれているのが得策と考えるのも当たり前だろう。賃金労働者が余計なことを考えずに主人の欲望に沿うようにする（ $\alpha=0$ にする）には、教訓などの共通の語彙を広めることが効果があるとあったが、まさにその通りだと思う。企業理念などを覚えさせる、暗唱させる企業も多いようで、そうすることで労働者は自然とその企業理念や経営方針に則った行動をできるという。主人の欲望を労働者に無意識のうちに刷り込んでいるのだ。

5. 第2章 人を“喜んで”労働させる方法

筆者は、君主の欲望＝支配的欲望を“エピチューメ”と表現した。最近の賃労働関係の変容により、賃金労働者の側でもエピチューメは拡大をみせている。そこで言えるのは、「内在的な楽しい感情を生産するということ」（同書 p.92）である。飢えは内在的な悲しい感情であり、消費の喜びは外在的なものであった。そこでエピチューメ工学は内在的な楽しい感情、つまり「直接的な喜びの源泉としての活動そのものに内在する欲望」（同書 p.93）を生産しようとくわだてる。そして労働をすることで開花し自己実現をしたいという欲望に変わり、労働生活と普通の生活の境界がなくなる。こうすることで企業は労働者にいくらでも追加的労働を組み込むことができるのだ。

さらに、企業は労働者に、①自らの規範にしたがって自ら努力する主体であること、②自由であることの2点を望む。つまり、労働者が自ずから動く自動機械であってほしいと思うのだ。われわれは、自動機械となることを自己決定したと勘違いしがちだが、「自ら進んで」というのは、行為に先立つものについてなにも語っていないため実は他律的に規定されている。作用の元は外部に目を向けねばならないが、そうするとすべての欲望はわたしのコナトウスであるため生き延びることができない。つまり、「受動的感情体制の下で感情の隷属が人間の条件になる」（同書 p.101）のだ。

この章でとても無理だと思ったのが、8.“恋愛経験”——“恵みの涙”のあとで、の項目でのサービス業についてだ。「通常のサービス産業の場合、賃金労働者は企業に必要な情動（客への感情移入、配慮、懇請、微笑、等々）を表現するように要請されるだけでなく、命じられた情動が単に表向きのものでなくて、“本当に”そう感じるように求められる」（同書 p.136）。これはかなり難易度が高いと思う。たとえばアルバイトでお客さんに「この服のMサイズがほしい」と言われ調べたところ自店在庫も他店在庫もほぼゼロ、今後納入予定なしだった場合お客さんにその商品のMサイズを売ることは100パーセント不可能なので、「ありません」の一言でこの現状は伝えられる。しかしサービス業でこんな一言で済ませようものならクレームがくるし、実際に来たケースもある。正しい行動は、自店・他店在庫なし、納入予定なしの旨を伝えて「これ結構前からあって、すごく人気商品だったんですよ……ほんとうに申し訳ございません（このときとても悲しい顔を

する。お客さんが年配女性の場合はオーバーリアクションをすとなおよい)」と言ってお客さんと一緒に残念がることだ。自分のために一生懸命在庫を調べてくれた、在庫がなかった残念さを共感してくれたという2点で満足して帰ってくれることが多い。べつにわたしはその商品がなくて残念だという気持ちは特になし、これはほんとうに表向きの「対応」でしかない。残念さを“本当の”感情にすると、ものすごく労力のいる作業だし、それを自然にできるようになったとき完全に企業に隷属したと言えるのではないかと思った。

6. 第3章 “労働による支配”からの脱却をめざして

支配者は、賃金労働者の行動を捕獲する。行動力を一人の企図に隷属させ、感情を搾取するのだ。そして主人は、賃金労働者に主人の欲望を自分自身と思わせること、決して主人になにかをさせられていると思われないことを念頭におき、賃金労働者を“機能させる”のだ。そしてこの隷属の状態からの突破口として筆者は共産主義を挙げる。資本主義は物質的必要性によって行われ、主人の欲望の自己中心主義に順応する形で機能してきた。それに対して共産主義はとにかく平等性を持っているというのだ。欲望の対象の捕獲を延ばせる方が支配できるため、通貨を通じて雇用者と労働者は立場が非対称であった。その点に関しての解決策なのだろう。また、別の仕方で生きる方法もある。怒りや悲しみが保守的な同意に打ち勝ったとき、反乱がおきる。制度的諸関係に従っていたが、それをひっくり返し奇跡的跳躍をみせることで、 α は 90° 、つまり直角になるのだ。最後に筆者は、捕獲からの開放は“われわれに許された希望”だとしながらも、われわれには理性が備わっており、人間の間人らしい生活をするべきだと締めくくっている。

隷属から開放される方法を示してくれてはいるが、これは果たして現実的なのか？欲するものへの通過点を断ち切ってまで隷属から解放されることはいいことなのだろうか？という疑問が出てきた。結局のところ、われわれにはなにも選択権はないのではないか。

7. まとめ

アルバイトは、自分が自分で決めて好きでやっているものだと思っていたが、本書を読んだただ企業に働かされているのを、あたかも自分が自ら働いているように経営者に見せかけられているだけだとわかった。ちょこちょこ褒められたり認められたりして喜びの機会を分配させられながら、やる気を継続させられてきたんだなと思った。

先にも述べたように、結局わたしたちは企業に隷属して労働するしか生きる道はないのだと思う。それが社会の仕組みだし、脱却するには共産主義にならないといけないみたいなので。よって就活で企業を選ぶ際は、企業がわたしたちを整列化するとき、個人個人の矯正がうまいところを選べばいいのだと思った。そうしたら、本書のようなことを考えずに、労働によって自己実現をし、喜びを得る。それが一番幸福なのではないのだろうか。

参考文献

なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？

(著) フレデリック・ロルドン、(訳) 杉村昌昭 作品社